

3 敷料入れ

(1) 敷料入れの目的

敷料を使うことには次のような目的があります。

- クッション性の確保
- 起き上がるときの滑り止め
- 肢や蹄などを擦れから保護する
- 牛体の汚染防止
- 牛床の水分を吸収し乾燥させる
- 保温や断熱

敷料をうまく使うことによってこれらの効果を最大限に引き出すことができます。敷料が少ないときの牛のサインは次のとおりです。

- 滑って寝起きがうまく出来ない
- 飛節が擦れたり腫れる（写真14）
- 牛体の汚れが目立つ



写真13 敷料たっぷりで牛体もきれい



写真14 飛節が擦れたり、腫れている

(2) 敷料の種類

一般的に使われている敷料には以下のような種類があります。

表1 敷料の種類と特性

敷料名	特徴
わら類（麦稈など）	水分を分離しやすい。クッション性高い。近年、価格が高い。
乾草類	入手しやすい。堆肥化には比較的時間がかかる。
おがくず・かんなくず	投入作業がしやすい（機械化できる）。水分含量によって性状は様々。木質のため分解は遅め。大腸菌群が多いものがあり、その場合は消石灰を混ぜると有効。
もみがら（粃米の外皮）	破碎処理をしたものなど種類は様々。おがくずと同様の作業性。
古紙（裁断したもの）	おがくずと混ぜて使う場合が多い。軽いため、作業時に飛散しやすい。
砂（粘土含量の低いもの）	無機物なので乳房炎の菌などが増殖しにくい。機械を摩耗させるなど、取り扱いに難しい面がある。



写真15 わら類



写真16 かんなくず



写真17 おがくず&古紙



写真18 砂

(3)牛床の手入れ（敷料の投入）

敷料は牛床全体に入れることが基本になりますが、量が確保できないときは使い方を工夫しましょう。

ア 敷料が十分確保できる場合

できるだけ凹凸をなくし、牛床全体にまんべんなく平らに敷きます。

イ 敷料が十分確保できない場合

ふんで汚れやすい乳房から尻尾にかけて敷料を入れます。乳房炎予防のため、特に乳房付近を保護することが重要になります。

敷料がない場合、牛床の水分と乳頭が接触しやすくなるため、乳房炎感染などの危険性が高まります。



写真19 乳房の周りをきれいにしている

◎A農場における牛床の手入れ（ベッドメイク）の事例

①牛床後部のふん尿や汚れた敷料を除去（写真20）

②ライン引きで石灰資材を投入（写真21）

③新しい敷料を投入（写真22）



写真20 汚れた敷料の除去



写真21 石灰資材散布



写真22 敷料投入

(4)環境性乳房炎について

環境性乳房炎とは、牛体、ふん尿、敷料など牛のまわりに常在する細菌によって引き起こされる乳腺組織の炎症です。細菌は水分と有機物があると増殖しやすいため、感染を防ぐにはふん尿で汚れた敷料を除去することが大切になります。

敷料（牛床）の管理では以下のことに留意しましょう。

- 牛床に清潔な敷料を投入する。
- 牛床の手入れの回数を増やし、ふん尿を除去したり、乾かす。
- 敷料とあわせて、石灰資材や衛生資材を利用することによって細菌が増殖しにくい環境を作る。

4 ブラッシング

(1) グルーミングとブラッシング

グルーミングとは動物が体の衛生や機能維持などを目的として行う行動のことで、毛繕いけづくるなどの行動によってストレスを緩和することを言います。

フリーストールで飼われている乳牛であれば牛同士のグルーミングは可能ですが、繋がれている場合はブラッシングにより、グルーミング効果が得られます。

(2) ブラッシングの効果

ブラッシングには次のような効果があります。

牛体の汚れを取る・・・牛体を清潔にする
牛のかゆみをとる・・・ストレス解消

そのほかにも乳牛と人間のより良い関係を構築したり、乳牛のちょっとした変化に気付くことができるというメリットがあります。

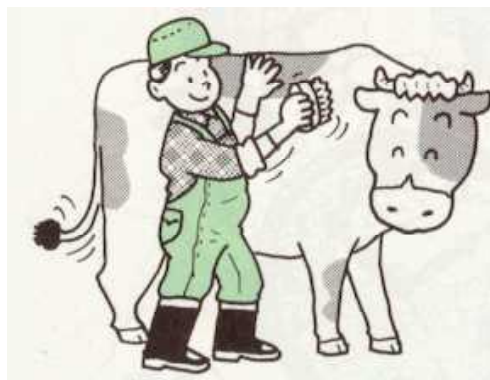


図1 ブラッシングは効果大

(3) 乳牛がかゆみを感じる場所

乳牛がかゆみを感じる場所（図2）を中心にブラッシングをすると効果的です。

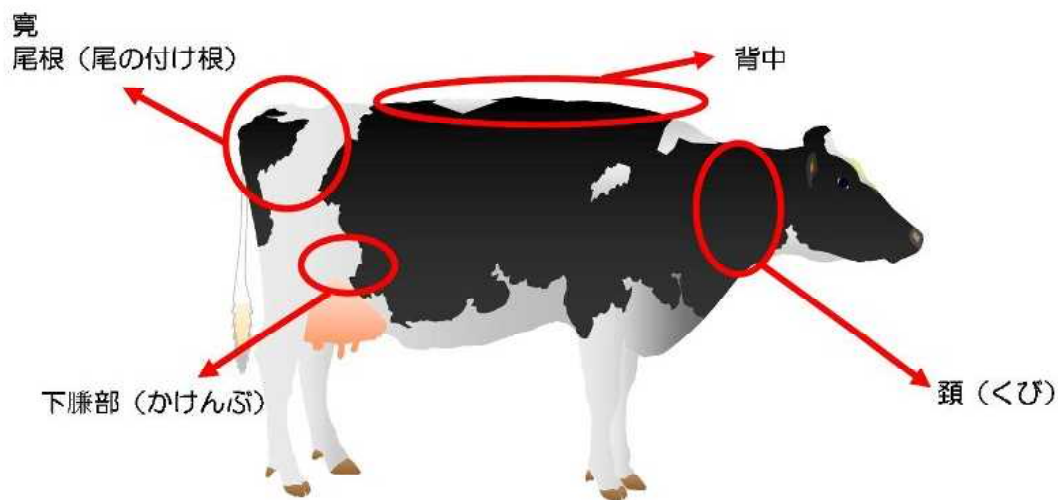


図2 乳牛はここがかゆい

(4) 電動カウブラシの利用

電動のカウブラシはブラッシングの手間を軽減するのに役立ちます。

ブラッシング作業が無くなり、労働の手間が軽減する利点がありますが、牛体観察がおろそかにならないよう留意しましょう。



写真23 電動カウブラシ

(5) ブラシの工夫事例

簡易なブラッシング器具として、施設の一部にブラシや代用品（プラスチック製の玄関マットなど）を設置することもストレス解消に有効です。



写真24 自作ブラシ（玄関マット利用）



写真25 自作ブラシ（ほうき利用）

牛の疥癬（かいせん）症について

疥癬症とは、ダニの寄生によって生じる皮膚病の一種で、主に牛の尾根部及び後肢の毛が薄くなり、フケ状の皮膚の損傷・脱落が見られたり、軽い出血が見られる場合があります。

寄生されるとかゆみを生じ、ダニの種類によっては重症化し、食欲不振を起こしたり乳量低下を招きます。

予防策として、ダニの駆虫を行う必要がありますが、主に以下の手法が取られます。

- ①イベルメクチン、モキシデクチン製剤を牛体に注ぎかける（搾乳牛には使用できないため、分娩予定28日前までの乾乳期に行う）。
- ②エプリノメクチン製剤を牛体に注ぎかける。
- ③フルメトリン製剤を牛体に注ぎかける。
- ④殺虫剤（粉剤）を牛体に撒布する。



写真26 寄生ダニによる疥癬症

これらの薬剤は、ダニの他にも様々な寄生虫に有効なため、放牧など野外中心で飼養する場合に用いられます。使用に際しては、獣医師にご相談下さい。